

京都大学大学院医学研究科附属動物実験施設の紹介

芹川 忠夫

附属動物実験施設長

京都大学大学院医学研究科附属動物実験施設の増築・改修工事が済み、平成15年7月7日から再稼動した。ここに、新装された建物の概要を紹介する。

本施設は医学部（現 医学研究科・医学部）における動物実験に関する共同利用研究施設として昭和47年5月1日に設置され、旧棟は昭和49年11月11日に開所式が行われた。その後、休みなく稼動し続けた動物実験施設の老朽化が進み抜本的な改修が必要になっていた。また、遺伝子組換えマウスの飼育スペースの拡大、多様な研究ニーズに対応できる実験室、手術室、感染実験室の整備も大きな課題となっていた。この長年の要望であった増築・改修工事が平成13年度の第2次補正予算として認められた。加えて、平成14年度に採択された科学技術振興調整費の一部をこれに充当して建物が完成した。

増築・改修にあたっての設計施工方針には、1. 広く（十分な飼育実験スペース）、2. 美しく（より美しく衛生的で安全性に優れ、従事者と環境に配慮した悪臭のない）、3. 使いやすい（機能性（動線の単純性）、防犯対策、低ランニングコストを重視）を掲げた。また、工事期間中の研究の継続への配慮が求められ、基礎・臨床構内の一部の部屋の動物室への転用、仮設動物室や実験室の設置、

さらには他機関の利用が必要であった。古くなった主要設備や新たな機能をもった飼育実験装置の設置には、医学研究科・医学部各分野等からの大きな支援を必要とした。

新装された動物実験施設は、地下2階、地上4階、述べ床面積が約9,400㎡であり国内最大規模の容積である。動物飼育室内は、温湿度を自動制御され高性能フィルターでろ過されたオールフレッシュ空気が従事者領域から収容動物側に一方向性に流れるシステムの設置により、動物の臭気とアレルゲンを激減させた清浄な飼育環境となった。SPF動物室に加えて、P2レベルとP3レベルの感染実験室を設け、安全に動物実験を実施できるようにした。また、ミニブタを含む中大動物の飼育室や手術室の増設、X線室、動物胚操作室、疾患モデルラット室、検疫室、SPF化待機室、セミナー室、研究室等を配備した。4基の専用エレベータ（SPF動物搬入用、一般人荷用、使用済みケージ等運搬用、滅菌済みケージ等運搬用）、広い洗浄滅菌室、動物死体専用焼却炉を備えて、微生物汚染のない環境で動物実験を実施できるようにした。また、自動入退館システムを取り入れ、防犯と微生物的レベルの異なった動物種の利用における病原体の持込防止に役立っている。

この最新の設備と機能を備えた動物実験施設が大いに活用され、動物実験を通じて得られた研究成果が医学生物学の発展と病気の治療法や予防法の開発改良に貢献することを期待している。



附属動物実験施設 外観



附属動物実験施設 メンバー